

パニウム - ナンバー・フォー

同盟

Jeff Pippenger

2025-03-04

パニウムの歴史において、アンティオコス・マグヌスとマケドニアのフィリップとの間に同盟が結ばれた。戦闘は、アンティオコスが幼王プトレマイオス五世を直接の相手として遂行し、フィリップは、領内の他地域での戦争によって、他の軍勢がそのエジプトの幼王を救援するために到来するのを妨げたという意味で貢献した。すなわち、エジプトの幼王によって典型的に表されている（「幼子」とは預言的に最終世代を意味する）南の最後の王プーチンは、パニウムでプトレマイオス五世を打ち破ったアンティオコス・マグヌスとして、また1989年にソビエト連邦を打ち破ったレーガンとして表象されるトランプによって、敗北させられるということである。

フィリップは「馬を愛する者」を意味し、「馬」は軍事力と経済力の双方を象徴する。馬は戦車を牽き、兵士が馬に騎乗し、また商品を市場へ運ぶ。「馬」は「戦車、船舶および騎兵」の象徴であり、この「戦車、船舶および騎兵」こそが、第四十節において示されているとおり、北の王との代理関係におけるアメリカ合衆国の主要な象徴である。

トランプの同盟者は、マケドニアのピリポスと分封領主ヘロデ・ピリポスという二つの類型において表象される。ヘロデ・ピリポスであれマケドニアのピリポスであれ、この象徴は、それぞれカエサルまたはアンティオコスから自らに授けられた権力を愛する者を指し示す。ピリポスは馬を愛し、また、ピリポスの一人はマケドニアの出身であり、マケドニアはアレクサンドロス大王の王国において中核的かつ基礎的な役割を担っていた。

マケドニアは、彼の祖国であり、父フィリップス2世から受け継いだ王国で、広大な帝国への跳躍台でもあった。ギリシア北部に位置するマケドニアは、アレクサンドロスが生まれ（紀元前356年、ペラ）育った政治的・軍事的な中核であり、彼の征服を支えた初期の資源、兵力、そして組織体制を提供した。要するに、マケドニアはアレクサンドロスの王国の核であり、その出発点であり軍事的原動力で、帝国が国境をはるかに越えて拡大してもなお、彼がマケドニア王としてのアイデンティティを支える拠り所となった地域だった。

マケドニアは、アレクサンドロスの四分された王国の北方地域を表す。それゆえ、一方のフィリポはテトラルクであり、その語は「四分の一」を意味する。他方のフィリポは、アレクサンドロスの旧帝国の四方の風の「四分の一」である。

ヘロデは契約を退ける者を象徴している。ヘロデへとつながる血統であるエサウは、自分の長子の権利を退けた。選ばれた契約の民の歴史のまさに初めにおいて、エサウは、キリストが確証するために死なれた契約を退ける者たちの象徴となった。神がその選ばれた契約の民を十二部族へと拡大しようとしておられたまさにその時に、エサウは反逆した。古代イスラエルの終わりに、十字架の場でユダヤ人が「われわれにはカイサルのほかに王はない」と主張したとき、ユダヤ民族は、初めにエサウによって示された型の、終わり

における象徴となった。ヘロデの家系は、エサウとユダヤ人の血統から成る。すなわち、その血筋は、初めには反逆する契約破りによって、終わりには反逆する契約の民によって象徴されている。

大ヘロデは、ヨセフとマリアがベツレヘムへ赴くこととなった課税を行った。また、その三人の息子の一人である大ヘロデの子ヘロデ・アンティパスは、十字架の時に統治していた。キリストの生涯の、降誕から死に至るまでの期間は、ヘロデ家によって象徴的に表されており、かくしてこの歴史は、選民が顧みを受ける時として同定されるが、その顧みをユダヤ人の大半は見ることがなかった。

ヘロデ大王はイエスの誕生を受けて幼子たちを虐殺し、こうして、エジプトが幼子を殺していたモーセ誕生時の歴史を繰り返した。最初の幼子虐殺は、期待されていた選ばれた者を殺そうとする試みであり、最後の幼子虐殺もまた、期待されていた選ばれた者を殺そうとする試みであった。十四万四千人はモーセと小羊の歌を歌い、預言的には「歌」は体験を表す。十四万四千人は、並行する体験を伴う時代に生きている。そうした並行の一つが、1973年1月22日に、米国で中絶を認める最高裁判所の判決によって現れた。その後の49年間で、連邦政府が公認した中絶によって、十四万四千人に加わる可能性のあったおよそ6600万人の候補者が虐殺された。

力は軍事力を象徴する：

私が見た獣は豹のようで、その足は熊の足のよう、その口は獅子の口のようであった。竜は自分の力と位と大いなる権威をその獣に与えた。黙示録 13:2。

竜、すなわち異教ローマは、教皇権に三つのものを与えた。すなわち「その力、その座、そして大いなる権威」である。12節では、アメリカ合衆国、すなわち地からの獣が、彼の前にいた獣のあらゆる「力」を行使する者として描かれている。ところが、12節の「力」と訳されている語は、2節の「力」とは別のギリシャ語である。2節の「力」はG1722で、その意味は「面前で（文字通りにも比喩的にも）」「臨在（目の前）において」である。

12節にある「power」という語は、別のギリシャ語に当たります。

彼は第一の獣の前でそのすべての権威を行使し、地とそこに住む者たちに、致命的な傷が癒された第一の獣を礼拝させた。黙示録 13:12

ここでの「power」G1832は（能力の意において）次のことを意味する。特権、すなわち付与された影響力—権威、管轄権、自由、権力、権利、力。十二節における「power」という語は、地の獣が海の獣の委任された権威であることを示している。すなわち、アメリカ合衆国は海の獣の代理的の代表者である。アメリカ合衆国は第一の獣から委任されたすべての権威を行使する。第二節では、異教ローマが教皇権に三つのものを与えた。クロヴィスは496年、トルビアクの戦いにおいて、その軍事的・経済的な力を教皇権に付与した。コンスタンティヌスは330年に帝国の「座」を譲り渡し、ユスティニアヌスは533年の勅令によって、ローマ教皇を異端者の矯正者ならびに諸教会の首位と認定した。496年のクロヴィスは1989年のレーガンの予型である。レーガンはトランプの予型である。

トゥールのグレゴリウス（ほぼ1世紀後に記した）によれば、クロヴィスは戦いで劣勢に陥り、絶望のあまりカトリックの神に助けを求めた。彼の妻クロティルドはカトリックのブルグンド王女で、彼に異教からの改宗を勧めていた。クロヴィスは、もし勝利したならカトリックに改宗すると誓った。すると形勢は逆転し（それが神の介入によるものか軍略によるものかはともかく）、クロヴィスはアレマン人を打ち破り、彼らの王を討って軍勢を四散させた。彼は誓いどおりカトリックに改宗して洗礼を受け、伝統的にはその洗礼は496年のクリスマスにランスで司教レミギウス（聖レミ）によって授けられたとされる。

彼の改宗は転換点となり、クロヴィスはゲルマン諸王の中で最初のカトリック王となった（アリウス派のキリスト教徒であった西ゴート人や東ゴート人とは異なり）。これによりフランク人はローマ教会と結びつき、彼はガロ＝ローマ系住民と教皇庁の支持を得た。クロヴィスの洗礼は、カトリック国家としての「フランスの誕生」を象徴するものとし、しばしば見なされ、アリウス派や異教を奉じた他の蛮族諸王国と一線を画すことになった。このため、カトリックではフランスを「カトリック教会の長子」および「カトリック教会の長女」と呼ぶ。

496年にクロヴィスが教皇権の最初の代理勢力となったとき、彼は1989年に代理勢力となったレーガンを象徴していた。レーガンと教皇ヨハネ・パウロ二世の歴史において、南の王を打倒することを目的とした秘密同盟が結ばれた。1798年から日曜法に至るまで、ツロの淫婦は隠されており、彼女はその起源を最も北の王国であるマケドニアにまでさかのぼる同じ淫婦である。彼女は預言的には隠された北の王であるが、それでもなお自らの無謬性を主張している。

ローマ教皇は、三つの代理戦争を通じて預言的には隠されているが、最終的にはパニウムの戦いの歴史の中で姿を現す「契約を捨てる者たち」をも表している。帝政ローマから教皇ローマへの移行に際し、ダニエルは、異教ローマが聖書の預言における第四の王国としての時代の終わりに差しかかっていたのがいつであるかを示している。

キティムの船が彼に立ち向かって来るので、彼は意気消沈して退き、聖なる契約に対して憤りを抱く。彼はそのようにする。さらに彼は戻り、聖なる契約を捨てる者たちと通じる。ダニエル書 11:30

「聖なる契約を捨てる者たち」とあるこの聖句において指されているのはカトリック教会である。聖なる契約を捨てる者とは、黙示のヨハネが描く妥協的なペルガモの教会であり、パウロによれば、不法の人が現れる以前に背教に陥るはずの教会である。カトリックは、神の御言葉に対して加えられた攻撃、ならびに第七日の安息日に対して加えられた攻撃によって示される、契約を捨てた者である。これら両者は、コンスタンティヌスの時代以降、漸進的な攻撃のもとに置かれてきた。また、十一章の前半でも「契約」への言及がある。

この二人の王の心は、ともに悪事を企て、同じ食卓で偽りを語る。しかし、それは成功しない。終わりが来るのは、なお定められた時になってからだからである。その後、彼は莫大な富を携えて自分の地に帰る。彼の心は聖なる契約に敵対し、行動を起こして、再び自分の地に帰る。定められた時に彼は戻ってきて、南に向かう。しかし、それ

は前のようでも、後のようでもない。ダニエル書 11:27-29.

これらの節では「彼」は自国に帰り、その後、再び自国に帰る。この二度の帰国は二つの勝利を表しており、その後にローマ市への凱旋的な「帰還」が続いた。最初は紀元前31年のアクティウムの海戦（アントニウスとクレオパトラに対する）であり、二度目は紀元70年のエルサレム破壊の後である。節中の「定めの時」は330年で、これは三百六十年に相当する第二十四節の預言的な「時」の終結を示している。

同じ卓で偽りを語る二人の王がそれを行うのは、「定められた時」の前である。「というのも、なお終わりは定められた時にあるからだ。」考慮すべき問いは、その節が「そのとき彼は莫大な富を携えて自分の地に帰る」と述べるとき、それは何を意味しているのかということである。これは「定められた時に、そのとき彼は帰る」という意味なのか。あるいは「二人が卓で偽りを語ったなら、そのとき彼は帰る」という意味であり、したがってその帰還は定められた時より前なのか。

Uriah Smithは、この二つの帰還を紀元前31年と紀元70年と特定しており、それは「定めの時」である西暦330年以前の歴史を示している。Smithはまた、29節の「帰還」は西暦330年以後の出来事であり、アクティウムおよびエルサレムの戦いの後であった帰還のようには成功していないことも指摘している。つまり、定めの際の前に偽りが語られる会談があり、その後、偽りを語っていた二人の王のうちの方が多くの富を携えて帰還し、聖なる契約に敵対し、偉業を行い、「定めの時」である西暦330年に帰還する、ということである。

その後、彼は南方を攻撃するが、それはアクティウムの海戦やエルサレムの破壊とは異なる。本箇所のある節における紀元70年の歴史は、当該箇所では「聖なる契約」として表象されている、神に選ばれた契約の民の終焉を描いている。三十節では、異教ローマが聖なる契約を捨てる者たちと内通する。紀元70年は、神の契約の民としての古代の文字通りのイスラエルのまさに終焉であり、三十節は、70年から四世紀後の歴史を指し示している。三十節で表象される歴史において契約を捨てる者とは、神とそのキリスト者の民との間に結ばれた契約を捨てた者たちである。教皇ローマは、三十節において聖なる契約を捨てる者として表されている教会である。

キッティムの船が彼に立ち向かって来るので、彼は意気消沈して退き、聖なる契約に対して憤りを抱く。彼はそのようにする。さらに彼は戻り、聖なる契約を捨てる者たちと通じる。ダニエル書 11:30

第29節は西暦330年を指し示しており、それはコンスタンティヌスが首都をコンスタンティノープルへ移したことによって定められた時が成就した時期であった。その時点で異教ローマは、アクティウムやエルサレムの場合のように成功を収めることのない南方の戦争に引き込まれることになった。続く第30節では、異教ローマはゲンセリックによって攻撃される。彼は、今日カルタゴとして知られるキッティムから海上戦を開始した。この異教ローマに対する戦いは、黙示録の七つのラッパの第二のラッパとしても表されている。これらのラッパのうち最初の四つの勢力は、西ローマを476年までに終焉へと導いた。その最初の四つのラッパのうち、第二のラッパ、すなわちキッティムの船が最も苛烈であった。というのも、ゲンセリックが海を掌握し、帝国の富が枯渇したからである。

キッティムの船に直面して悩まされ、彼は引き返して聖なる契約に対して憤りを抱く。これは、神の言葉に対する戦いを通して、538年における教皇権の権勢確立へと至る歴史の中で成就した。その後、彼は引き返して、「聖なる契約を捨てる者たちと通じる」。異教ローマと教皇ローマのその関与は、ユスティニアヌスの勅令によって533年に成就した。次の三十一節は、異教ローマがどのように「悩まされた」かを述べて続く。テサロニケ人への第二の手紙において、パウロは、異教ローマが538年に教皇権が支配権を掌握するのを「抑制していた」と教える。海からの攻撃によって王国の経済が破綻し、彼が悩まされたのち、彼は聖なる契約に対して憤りを抱き、ついで契約を捨てる者たちと通じる。次の諸節では、クロヴィスによって496年に教皇権に与えられた権力を表す「腕 (arms)」が立ち上がり、彼らは力の聖所を汚す。歴史においてそれはローマ市を表していた。そして異教ローマは、領域から異教の宗教 (the daily) を取り除き、それをカトリック教に置き換え、さらに538年には教皇権を王座に据えた。

538年に教皇権が権勢を得たとき、それは、私たちが考察している聖句に表されている預言的な証しと歴史的な証しの双方を提供した。538年は、紀元前31年のアクティウムの海戦によって象徴されている。ダニエル書8章9節では、異教ローマが地上の王座を得るために三つの地理的障壁を征服するとされる。最初は東のシリア、次いでユダとエルサレム、そしてアクティウムの海戦によってエジプトであった。教皇ローマもまた三本の角を引き抜かれることになり、その三番目は、538年にローマの都から追い払われたゴート人であった。異教ローマと教皇ローマは、アクティウムの海戦が538年に一致することを示す二つの証しを提供し、さらに538年は、恩恵期間が閉じられるまで現代ローマが至上権をもって支配する、アメリカ合衆国における日曜法を例証している。

二十七節から三十一節に関する概観を了した。

次稿では、これらの節に焦点を当て、当該箇所を十一節から十五節に記された歴史と整合させる作業に着手する。